

2022. 6. 1

# 現代俳句千葉

145号

巻頭エッセイ

乗り越えて、前へ 会長 並木 邑人



令和二年、三年、四年とコロナ禍により総会が中止となり、創立四十周年記念を含む俳句大会も事前投句部門のみにて打切りとなつてしまいました。規約も想定していない非常事態の中で、どのようにして協会を進めることができるのか模索する日々でしたが、一方では会員数を大きく減少させる結果となつてしまい、力不足をひしひしと感じる三年間でもありました。

このような中で、四年度は役員改選を予定していたため、これまでの役員による投票に加えて、総会出席予定者にも書面決議をお願いしたところですが、この結果、委任状と合せて総ての議案の承認と共に新たな役員体制が発足することとなりました。これからはコロナ禍との格闘が継続することを念頭に入れながら、一歩でも二歩でも前進したいものと考えています。皆様のお力添えをお願いいたします。

前号でも触れましたが、幹事会の運営体制をより実働的なものに改変いたします。具体的には副会長を規約の上限である五名体制とすること、事業部、渉外部に代つて協会組織の基礎固めを図る強化部、事務局の調整役である総務部を新たに設置し、従前の広報部、企画部、俳句大会部門と併せてそれぞれの責任者を務めていただきます。

そして協会の体幹を丈夫にすると共に、大切なことは会員会友一人一人との連繋です。俳句大会も吟行会もない、句会もないでは、俳句への意欲も情熱も薄れてしまいます。協会では機関紙「現代俳句千葉」に作品発表と評価の場、交流の場を設け、また俳句の原点である四つの研究句会を運営しています。これを可能な限り対面句会とし、日常の立ち居振舞いと季節の移り変りを俳句に詠むだけではなく、現代俳句の強みである事件・事象・差別・孤独・格差などに揺り動かされる心情を表現することで、俳句文化そのものを前へ前へと発展させる意識を共有したいものと考えています。

## 目次

乗り越えて、前へ 並木邑人	1
令和四年度総会	2~3
令和四年度俳句大会	4~5
春の吟行会	6~7
新会員・会友紹介	8
諸家近詠	8~10
会員・会友の近況	10~11
私の感銘句	11~13
津田沼研究句会報告	14
青葉研究句会報告	14~15
柏研究句会報告	15
君津研究句会報告	15~16
ひろば・図書紹介・掲示板	16

千葉県現代俳句協会会報



(3)

[第2号・第3号議案]

令和3年度の会計報告

[令和3年1月1日～12月31日]

収入の部

(単位:円、%)

科目	予算額(a)	決算額(b)	対比(b)/(a)	摘要
俳句大会	555,000	577,000	104%	事前投句の部のみ実施
吟行会	120,000	46,000	38	秋のみ実施
協会運営	624,000	604,212	97	本部よりの助成金、会友費
合計	1,299,000	1,227,212	94	

支出の部

(単位:円、%)

科目	予算額(a)	決算額(b)	対比(b)/(a)	摘要
総会	285,000	34,044	12%	中止
俳句大会	356,000	336,856	95	事前投句の部のみ実施
吟行会	125,000	67,730	54	秋のみ実施
会報発行	535,000	507,677	95	年4回
協会運営	265,000	58,223	22	幹事会4回中3回書面にて実施
合計	1,566,000	1,004,530	64	

次年度繰越金

(単位:円)

当年度収支差額	222,682
前年度繰越金	1,394,230
次年度繰越金	1,616,912

財産目録

(単位:円)

普通預金	1,318,169	千葉銀行稲毛東口支店
現金	298,743	会計 (50,314)
		吟行会 (39,270)
		事務局 (154,220)
合計	1,616,912	会報 (54,939)

監査報告書

令和3年度の会計及び事業の執行状況について監査した結果、すべて証票書類と一致しており、正当に処理されていることを確認しました。

令和4年1月25日

監査役 吉野 精

監査役 内田 茂

[第4号議案]

令和4年度事業計画(案)

1. 行事

- (1) 定期総会・俳句大会  
 ① 令和4年度総会 3月20日(日) 千葉市文化センター  
 ② 同上 俳句大会 同上 同上
- (2) 吟行会  
 春の吟行会 4月21日(木)  
 吟行地:市川市・万葉植物園 会場:船橋市勤労市民センター  
 秋の吟行会 未定
- (3) 研究句会  
 ① 津田沼研究句会 毎月第2火曜日 午後1時より  
 津田沼1丁目町会会館(2句事前投句方式)  
 ② 青葉研究句会 毎月第4木曜日 午後1時30分より  
 千葉市民会館(3句事前投句方式)  
 ③ 柏研究句会 毎月第2土曜日 午後1時より  
 柏市ハックルベリー書店(5句当日投句方式)  
 ④ 君津研究句会 毎月第1木曜日 午後1時30分より  
 君津市生涯学習交流センター(3句事前投句方式)

2. 幹事会等

定例幹事会

- 第1回 1月25日(火) 船橋市勤労市民センター  
 第2回 5月24日(火) 同上  
 第3回 8月23日(火) 同上  
 第4回 11月22日(火) 同上

臨時幹事会

- 業務引継 4月8日(金) 同上

3. 会報の発行

- 第144号 (3月1日刊)  
 第145号 (6月1日刊)  
 第146号 (9月1日刊)  
 第147号 (12月1日刊)

[第5号議案]

令和4年度予算(案)

[令和4年1月1日～12月31日]

収入の部

(単位:円)

科目	予算額	前年度予算額	前年度決算額	摘要
俳句大会	555,000	555,000	577,000	事前投句 当日席題
吟行会	100,000	120,000	46,000	春、秋2回
協会運営	580,000	624,000	604,212	本部より助成金、会友費
合計	1,235,000	1,299,000	1,227,212	

支出の部

(単位:円)

科目	予算額	前年度予算額	前年度決算額	摘要
総会	230,000	285,000	34,044	午後半日
俳句大会	355,000	356,000	336,856	事前投句 当日席題
吟行会	100,000	125,000	67,730	春、秋2回
会報発行	535,000	535,000	507,677	年4回
協会運営	280,000	265,000	58,223	総務部を含む
強化部	50,000	0	0	新設
予備費	150,000	0	0	
合計	1,700,000	1,566,000	1,004,530	

次年度繰越金

(単位:円)

当年度収支差額	-465,000	-267,000	222,682
前年度繰越金	1,616,912	1,394,230	1,394,230
次年度繰越金	1,151,912	1,127,230	1,616,912

# 令和四年度俳句大会

(後援) 千葉県教育委員会・千葉市・  
毎日新聞社・千葉日報社・  
朝日新聞社千葉総局)

今年度もコロナ禍のため俳句大会が中止となりました。これで三年連続の中止でしたが、今年度も事前投句の部にはたくさんのご投句をいただきました。誠に有難うございました。

そして、大会関係者のご協力で、投句者の全員の方に作品集をお届けすることができました。事を深く感謝申し上げます。

来年度も俳句大会を開催する予定ですので、是非ともご参加いただきますよう心よりお願い申し上げます。  
(岡田春人記)

## 〈入賞者作品〉

● 千葉県知事賞

もう誰の墓でもなくて銀木屋

なかもと淑子

● 千葉県現代俳句協会賞

案山子の言葉判る村長当選す

國分 三徳

● 千葉市長賞

たましいは火色とおもう三島の忌

田沼美智子

● 千葉県教育長賞

桜満開とところどころが飢えている

石井紀美子

● 毎日新聞社賞

野火叩く農継ぎし子も継がぬ子も

高橋富久江

● 千葉日報社賞

老いるにも器用不器用花菜漬

加藤 法子

● 朝日新聞社千葉総局賞

大寒や生あるものはすぐ乾く

高橋 健文

● 優秀賞

八月のさみしき遊び缶を蹴る

徳吉洋二郎

日向ぼこやがて煙となるもよし

加藤 法子

COVID-19神獣鏡が目覚ます

並木 邑人

冬りんご感受性は転がらない

白木 暢子

今宵だけ溶かさずにおく雪女

森本 香子

セーターを去年のいのちごと纏う

藤田 富江

● 秀逸

悲しみの雪の一戸へ道つくる

加藤 法子

満月を貰い途方に暮れている

國分 三徳

甚平や絶滅危惧種のようにいる

石井紀美子

痛みに時々触る流れ星

長濱 聰子

ここからは一人ずつです葛の花

坂間 恒子

抽出しを引けば急流寒椿

並木 邑人

まうしろはとでもやっかい自然薯掘る

神作 仁子

雪の夜やランプにガレの花ひらく

千葉 智司

泥葱の剥かれ明るき挫折感

伊藤 希眸

息詰まるほどは抱かれず外は雪

徳吉洋二郎

寒波来る北斎の波越えてくる

越野 雄治

● 佳作

青い空青いつゆ草妹よ

高橋 宗史

かなかなの正しい呼吸終の日も

栗原かつ代

天高しその上にある父母の空

若林 佐嗣

半身は麻酔半身はさくらさくら

長濱 聰子

口答え好きは二月の風になる

下村 洋子

冬青空一枚かかえ入院す

並木 邑人

大根引く穴一つづつ暮れかかる

馬淵 津枝

人間をやめる日梟になる日

細根 葉

からだじゅう波音となり椿濃し

久野 康子

あおくびだいこん曲線に愛がある

白木 暢子

年の湯に齡を沈めまあだだよ

星野 一恵

小春日や磁石のような古本屋

松本 秀紀

花八ツ手多数決となる不安

大藪 智子

どこかほつとなにか切ない七草粥

伊藤 希眸

カタカナを壊したような霜柱

山本 敏倅

## 入賞作品自解

〈もう誰の墓でもなくて銀木屋〉

なかもと淑子

コロナ禍に見舞われる直前、松山市の子規堂を訪れる機会があった。質素だが静謐な住居と古びた句碑や歌碑が幾つかあった。句碑の磨滅した文字の上に傍らの大木から積るほどの銀木屋の花が降りしきっており、永い時の経過を感じた。年々、これからも静かに続いてゆく光景なのであるうと思つた。

〈案山子の言葉判る村長当選す〉

國分 三徳

昼も夜も「ただ立ち通し」で村の田畑を守つてくれている案山子。村人からも通りすがりの人からも愛され親しまれている案山子はもう立派に村の人になつていゝのです。だから村長になる人には案山子の言葉が判つて、案山子の気持も汲み取つて欲しいのです。そんな村長の物語から生まれた句です。

〈たましいは火色とおもう三島の忌〉

田沼美智子

三島由紀夫没後五十年の忌日に、三島のたましいは火色であったと直感した。魂の色は人それぞれ、生きている時々の色合いと考えられる。三島が美の肉体へ改造に向く時、熱い魂は朱色。文学の創作や日本心をもって政治活動した時期の魂は光を放ち金色。そして自決時のたましいは完全燃焼の青色と想う。

〈桜満開とところどころが飢えている〉

石井紀美子

ここ数年、続けて恩師や身内を何人も見送った。悲しみの傷口が塞がらないまま、更に夫との永別。今以て胸中の喪服を脱げないでいる。その後も大切な人との別れは、コ罗纳下で面会も叶わぬまま、桜は何事も無かつたように満開に……。愛してやまないその美しさの中に、心底笑えぬ自分がある。

〈野火叩く農継ぎし子も継がぬ子も〉

高橋富久江

ウオーキングをしていると、空から黒い物が落ちてきた。更に行くと、煙の中に人影が見えた。野焼きをしているらしい。

野焼は農業の人も勤め人も一緒に枯草を焼き、害虫の幼虫や卵を焼き払う春の恒例行事。このような共同作業により地域の絆が深まり、暖かい人間関係が形成されていくのだろう。

〈老いるにも器用不器用花菜漬〉

加藤 法子

老いるという言葉成る可くは遠ざけて、日々を過ごしたいと切に思う。

丈夫な体と柔軟な心であれと言いつ聞かせながら……。不器用も器用のうちとか。芥子菜の花の、かたい蕾の、歯触りを慈しみながら、ざつくばらんに暮らして行く。

〈大寒や生あるものはすぐ乾く〉

高橋 健文

大寒は二十四節気の一つで、一年で最も寒い時期。飯田龍太の〈大寒の一戸もかくれなき故郷〉にあるように、満目蕭条たる景色が広がる。枯れ果てた草木のみならず、生き物の動きは皆鈍くなり、心まで乾き切っているように思える。春は目の前という気持ちもなかなか湧いて来ず、枯渇する己の心を持って余すしかない。

### 大会作品一句鑑賞

並木 邑人

〈あの世から出せぬ賀状を書きしかな〉 池田 幸

年賀状が年々少なくなってきた。同じ事を毎年書くのはしんどい、ラインで済む挨拶は不要、終活につき賀状も終了、惰性にて時間を浪費する義理はない等々であろう。一言で相手を唸らせる痛快な一枚もあるが、毎年は期待できない。それでも一行一行丁寧に認められた年賀状を読むのは嬉しいものだ。

高橋 健文

〈ここからは一人ずつです葛の花〉 松本千花

飯島晴子の〈葛の花来るなど言ったではないか〉は、どこか他人の介入を拒否するかのようなニュアンスがあるが、掲句も、一つの領域に踏み込む時のやや緊張した場面、または誰にも頼ることのできない道に踏み入る時のような状況を連想させる。「葛の花」という紫紅色の蝶形の花との取り合せが巧みである。

高橋 宗史

〈もう来ない街角で買ふ花の種〉 越野雄治

近いのに一回行つたきりの街や通過の最中にもう二度と来ないと感じる街、また後にあれが最後だったと知る街。街角でなく、街。もう来ない街角だ。生きる途上出遭つた、とある街角への哀惜。一期一会。街でなく街角の表現が憎いねと言つた問題を越えて、俳句形式ぎりぎりて捉えたりリズム。彼に残るのは盛りの花。

徳吉洋二郎

〈半身は麻酔半身はさくらさくら〉 長濱聰子

作者は満開の桜の下に居る。或いは眺めている。自分の半分は確かにその実景の中に存在するが、あとの半分は麻酔のかかった状態と云っている。作者はどんな状況にあるのか、何を訴えたいのかストレートには伝わらない。しかし桜の幽玄の世界があり、作者の心象を想像させる。読者を惹きつける秀句だ。

# 春の吟行会

## 市川市万葉植物園

会場 船橋市勤労市民センター 令和四年四月二十一日(木)



好天に恵まれた日、武蔵野線市川大野駅に集合。五分程歩き更に、長い茶色の階段を上りつめると植物園である。万葉集に詠われている植物を集めた和風庭園、物語に溢れた万葉の

時代にタイムスリップした一時であった。

階段の上は極楽藤満開 東 國人

奈良時代のはじめに山辺赤人が下総国府を訪れた折に絶世の美少女である手児奈の哀き伝承を聞き詠った歌は「われも見つ人にも告げむ葛飾の真間の手児名が奥津城処」が万葉集に収録されている。

人麻呂と赤人に遇う春の夢 小野 功

在原業平はあまりの桜の美しさに「世の中にたえて桜のなかりせば春の心はのどけからまし」と詠い人々を魅了し続けている。

熊谷草が母衣を開いたように咲いていた。

熊谷直実と平敦盛の悲哀物語は今も涙を誘う。「青葉の笛」は小学唱歌に教えられてきた。

芭蕉は「かつみ、かつみと尋ね歩き」「更に知る人なし」と「奥の細道」に記している

幻の花「花かつみ」が薄紫の花をつけていた。夢うつつの園の美しさに見とれてばかりは

いられないご時世である。ロシアとウクライナとの激しい国境戦争をひと時も忘れることはできない。

錯乱の国あり熊ん蜂の羽音 高橋健文

防人いままも碓草風に揺れ 高木一恵

家持か人麻呂か蜂に追わるるは

木之下みゆき

吟行会もコロナ禍に阻まれ、思うように開催出来なかつたが、久方ぶりの句友との再会にこころおどるひと時であった。

参加者四十一名(欠席投句者七名を含む)

当日は、選句までで解散。吟行会幹事と役員が残り、選句(二句合点)の集計を行った。

司会・高橋宗史 写真撮影・岡田春人

(長井 寛記)



藤棚と池



植物園の入り口



クマガイソウ

〔一〇十五位入賞者作品〕(二句のうち一句掲載)

- ① 錯乱の国あり熊ん蜂の羽音 高橋 健文
- ② 家持か人麻呂か蜂に追わるるは 木之下みゆき
- ③ まろまろと言霊集むおきな草 久野 康子
- ④ 防人いままも碓草風に揺れ 高木 一恵
- ⑤ ほんわりとしよりほんわりとおきなぐさ 東 國人
- ⑥ ふはり問ひふはり答ふる熊谷草 岡田 春人
- ⑦ 落ちつばき生き生きと踏まれおり 下村 洋子
- ⑧ ひとりしずか闇の奥より白拍子 池田 博臣
- ⑨ 枳殻の刺に初恋掛けつばなし 並木 邑人
- ⑩ 藤の花揺れて見逃す恋泥棒 羽村美和子
- ⑪ 良し悪しは曖昧なもの翁草 遠藤 寛子
- ⑫ 春や春おいてきぼりの実が三つ 保坂 末子
- ⑬ 二人静や軽いオマージュが憎い 田村 隆雄
- ⑭ 古歌めぐる先へ先へと紋白蝶 星野 一恵
- ⑮ 春はせせらぎ万葉の童唄 山崎 政江



園内を散策



選句を控えて

〔並木邑人会長 特選〕

防人いまま礎草風に揺れ

高木 一恵

〔その他作品〕(二句のうち一句)

順不同)

くまがい草夏の扉に揺れだした

山崎 公子

まぼろしの幸せなか藤の花

伊与田すみ

先の世に忘れきしこと翁草

佐藤 禎子

逆落しも戦もあるな熊谷草

長井 寛

武士の矜持を語る熊谷草

山口 明

晩春の狭庭どこを見ても日本

黒澤 雅代

へめぐつて甘い疲れや万葉の園

なかもと淑子

桜葉降る吟行のそこはかと

大藪 智子

万葉園どこ曲つても惜春賦

小野 功

手は握るべし風車回すべし

椎名 鳳人

タクトはじめ藤房の音合わせ

諸藤留美子

木の中に風持ちており花楓

三宅たくみ

枯びいる柏葉に風夏近し

森井美恵子

結界の高さなりしや藤の花

石井紀美子

万葉の一重山吹小さきまま

高橋 宗史

藤の花揺れに揺れるて戦悲し

山崎 幸子

イカリソウ手足の動きぎこちなく

片岡伊つ美

嘆きのように祈りのように熊谷草

松本 千花

時かけて万葉人のさえずれり

島 隆史

万葉の白山吹きに恋しけり

川島 里子

万葉園隅より生まる夏の季語

高橋 博

四月の空サヨナキドリの疲労

白木 暢子

万葉の恋のときめき花馬酔木

三浦 侃

藤棚に憩ひ万葉想ひはせ

山崎 和久

万葉の時空の戸口山躑躅

川上 典子

コロナ身近に葉桜が遠くなる

西崎 久男

吟行句作品評

高木 一恵

〈錯乱の国あり熊ん蜂の羽音 高橋健文〉

万葉の園は藤の盛りで、細腰の美少女「すがる乙女」に喩えられたジガ蜂ならぬ熊ん蜂が頭上を掠めてきた。万葉仮名では「蜂音」を「フ」と読み、鬱々と心晴れぬ意のイブセクモを馬声蜂音石花蜘蛛と表記する。コロナ禍に強国の侵略戦争まで加わり、石牟礼道子の〈祈るべき天とおもえど天の病む〉を想う昨今、蜂の羽音にも錯乱の国が浮かぶ。

長井 寛

〈善し悪しは曖昧なもの翁草 遠藤寛子〉

満開の藤の花、白拍子の一人静、遅咲きの桜など万葉園に咲く花は何れ劣らず人々の目には殊の外美しく映るものである。

春だというのに世界は戦争の悲惨な惨状に

心痛している。戦争の善し悪しは明白白にも拘わらずこころも「曖昧なもの」だったのかと詠う作者に共鳴しきり、大地に深く根をはる翁草が絶妙である。

木之下みゆき

〈水音を逸れたる水を四十雀 保坂末子〉

万葉園は狭庭ながら地形の段差を利用し、せせらぎから、池面へと水が流れ込んでいた。水音を逸れたのは水ばかりではない。四十雀も逸れたのだ。この四十雀、なんと、単語を繋げて文体で会話が出来らしい。鳥の可聴力は人の十倍というから、人に心地よいせせらぎも鳥には滝音か。静寂を破り自慢の喉を聴かせたい四十雀。作者の精緻な耳目に敬服。

吟行作品総評

並木 邑人

雑草に埋もれた万葉園が多くある中で、市川の植物園は丹精に整備され、名札もきちんと表示されていました。そのためか、俳句より植物名が脳内を駆け巡る一日でした。

防人いまま礎草風に揺れ 高木一恵

特選に選ばせていただいた句は、古典に造詣の深い高木さんの作品でした。古代の辺境防衛に赴いた防人は、現代においてもウクライナで、世界中の紛争地で任に当たっています。「礎」はまた怒りのフォルムでもあるのです。

新会員・会友紹介

流山市東深井 鳥取 芳子(会員)

(推薦者 秋尾 敏)

春うららエンドロールをはじめから

噴煙はおまけ母の色違い

隣度を空ける鯉のぼり寛解

千葉市中央区 安井 三緒(会員)

(推薦者 山崎 十生)

コロナ禍や祭提燈のみ灯し

父の日を装飾音符のごと坐しぬ

なにか炊く醤油の匂ひ浦祭

市川市南八幡 大喜 京香(会員)

(推薦者 後藤 章)

傘を打つ五月雨の音我だけに

大漁の野辺の送りか鯛雲

冬の星流れる一機異国へと

四街道市つくし座 浅見美代子(会友)

(推薦者 並木 邑人)

武者人形赤子のようにそと出し

カーネーション一本ずつに母がいて

八重椿零れて紅の帯となる

四街道市つくし座 三浦はつ江(会友)

(推薦者 並木 邑人)

ウクライナひまわり恋し離岸流

頭陀袋ひとつほどの身島四国

その先は獣道らし木瓜の花

四街道市千代田 新澤 誠(会友)

(推薦者 並木 邑人)

薬や生き抜くすべを戦禍地へ

万人の想いを積みし花筏

菜種梅雨端切れ広げソーイング

四街道市旭ヶ丘 大庭 芳郎(会友)

(推薦者 並木 邑人)

無住寺や傷む仁王の目にさくら

木暗しや堂の裏手の神隠し

早苗田に分薬を待つ羽風かな

大網白里市みやこ野 柴田 洋吾(会員)

(推薦者 松林 孝志)

春潮の汀に拾ふ虚貝

春場所やミナミの綺羅もマスクして

春耕の隣りの土盛りもぐら塚

船橋市二和東 川守田美智子(会員)

(推薦者 村田 珠子)

生き死にや骨うつくしき桜鯛

散りゆくも契りのひとつ春惜しむ

宇宙へと大きな欠伸葱坊主

袖ヶ浦市岩井 陸野 良美(会員)

(推薦者 羽村美和子)

若葉雨全感覚に染み込ませ

梅雨の月あなたの夕サい服たむ

朝顔はそっけない顔電車来る

四街道市さつきヶ丘 土肥 勲(会友)

(推薦者 並木 邑人)

卓袱台を囲みし頃や太鼓焼

「イマジン」を聴けよブーチン春嵐

応援の校歌吹奏躑躅燃ゆ

諸家近詠

澤田 寿一

身の丈を崩れ落ちたり蜃気楼

郭公に先を越された古時計

仰向けに力を抜いた油蟬

初心者のスマホに羽根あり鯛雲

白菜の縮こまりたる四半分

関谷ひろ子

退屈な碁盤動かす十二月

一年を山の景なる古曆

甲高き杖の先なり初氷

極月の空に馴染みし高架橋

半徑を短かく暮らし落葉踏む

田村 隆雄

押しくら饅頭愛日へ突き放つ

裸木の憂いきのうの深き青

凍てるほど純度の高い愛がある

逡巡の蓮の骨みてからの夜

全身の力を込めて日脚伸ぶ

長濱 聰子

両腕は波止場鼓動は春の潮

パンドラの箱のどん底が三月

流水期面会謝絶のドアが開く

舞い上がり易き椿から墮ちる

憲法九条太刀魚はぶつ切り

中澤 一紅

腹時計少し早目の花の屋

うつし世の落花浴びたるこの世かな

夕されば花のひかりの散り敷ける

脇役の人生もよししやばん玉

雑念を空に消しゆく春の月



伊勢より始まる手鞠唄わらべ唄  
 妖怪なれたら楽し花万朶  
 桜花満つ堤にひそと空襲碑  
 はるか生き首の牽引春終る  
 衿に差す大判小判酉の市

浪本 恵子

木々芽吹くダム湖の空を賑わして  
 湯の宿に飼われし蛙鳴いており  
 ぶらんこを漕ぎつつ答う一年生  
 児が叩く別れの父の胸余寒  
 すこやかに生ききて米寿花浴びる

馬場 益江

獣めく樹皮のささくれ風二月  
 力要る墓苑の鉄扉落椿  
 太りきつた芋虫何もなければいい  
 姨捨というパーキング蔦紅葉  
 解体の家屋に隣る春障子

直江 裕子

塗り残した白いところが春愁  
 一瞬の椿のためらい見てしまふ  
 光秀のきつと愛した花馬酔木  
 キリンの首はながーい春の渚  
 桃咲いて儂きことをはかなくす

富田 茂

ゴミの日の空に広がる鱗雲  
 年の暮処分できないハイヒール  
 雪の朝雀は食事したろうか  
 冷える夜テールランプが国境へ  
 好きでしたこの漉餡の桜餅

島 淑子

夏座敷潮風太く抜けにけり  
 新涼の一つ帆の見え一の宮  
 名月や雑木林に鳥けもの  
 加湿器の微音帰らぬ時間かな  
 冬蜂のいつまでも追ふユートピア

中村 博子

初機影洋上風車立ち上り  
 桜隠し鎮魂の歌海底に  
 潮の香のほのと房州うちはかな  
 下総の空の余白に紫苑揺れ  
 小学生の輪禍の道や麦は芽に

永妻 和子

顔上げて語るふるさと野の兎  
 空き家かも否花辛夷声挙げる  
 格差とは無縁さくさく春キャベツ  
 道あけてつかまり立つや貝母の芽  
 心してささくれ立つを耕せり

富澤さち子

春北風ニュースの顔の入れ替わる  
 春の雪気巧は嬰を抱くかたち  
 完璧な目玉焼なら更衣  
 栗羊羹端っこ好きで末っ子で  
 秋は窓際カフェラテのMサイズ

中村 冬美

梅二月思いのままのペン走らせる  
 夜桜の鼓動そのまま相聞歌  
 春の暮れ自作自演の迷い人  
 生き死にを時には思う桜の夜  
 深梅雨の物言いたげな葉指

中嶋 三雄

雪うさぎ帰りましたよ母追ふて  
 紅梅の半分見えて五分うれし  
 春風もいれて私のMRI  
 逢ひたいと書き云ふだけの亥の子餅  
 片言も乗せてさくらや菜の花や

袴田 菊子

前世は何者だった春落葉  
 黙もくと土筆の袴捌きけり  
 穂の芽がすきで彼の世へ逝つたきり  
 じゃんけんで負けて父さん赤まんま  
 昨日よりきょうの眩しき山吹草

野口 久

夜を纏ふ淵のさくらの黄泉明り  
 女身仏春水鏡のナルシスト  
 死は生の対極ならず春銀河  
 隠れ咲きなほ罪深き坪すみれ  
 酒蒸しの浅刺出自を語り出す

富澤ムツ子

まいまいと掛けてあなたの愛と解く  
 真つすぐの胡瓜のなんと折れ易し  
 奇つ怪とは我が心なりなめくじら  
 前髪が目刺さりそうシャーベット  
 アカシアの鋭き棘よ身構える

野口 京子

花筏毀れて水の還らざり  
 雉笛の鳴かぬ日はなく妻恋うる  
 少しずつ古い新緑のまたたく間  
 蚕豆の端の一つは生きべたか  
 瞑想に紛れる雁の別れかな

永井 奈々

諸家近詠

徳吉洋二郎

寒波来る北齋の波越えてくる  
無言という音あり冬銀河あり  
人声の垂直に来る寒さかな  
きのうより大きな夕日春田打つ  
八月のさみしき遊び缶を蹴る

戸邊 光一

地獄そば白過ぎるから根は素直  
白蝶の来て軽やかに鳴るピアノ  
春満月少し曇るは下心  
燕来る去年のままに納屋庇  
夏草を刈って巨大になる鼻孔

馬場 馬子

踏みその酒の肴や所思ふ  
タンポポの絮ついてくる帰り道  
唄や娘三人妻に婆  
ひたすらに歩く八十路や山笑ふ  
花びらが相乗りしてゐるペビーカー

中里 結

眉を描く傍らに夏来てゐたり  
竹落葉もの思ふとき遠く見て  
上げ潮にのつて流離の海月かな  
五月闇一樹に防犯カメラ据ゑ  
草叢のほむらのごとし青大将

津高里永子

支へ合ふ石の陰翳遍路寺  
遍路寺流水岩を踏めば雨  
巡礼や崖を占めたる著我仰ぎ  
山門にガーベラ赤く咲かず寺  
穏やかな波に島浮く遍路道

永井アイ子

飛鳥山の桜は長い手紙のよう  
花文字のランチのメニュー桜東風  
風呂敷は丹後縮緬花見弁当  
ゴシックの社名の尖る花の雨  
ティータイム歩く人見てる花疲れ

宮原 青佳

炎昼やここに暴るる胎児居り  
梅咲きて十月十日の終わりにゆく  
泣き止まぬ子のこめかみや春北斗  
糠床を混ぜる手三つ初節句  
落炊くや母の手偲ぶ日曜日

並木 邑人

空襲忌知らぬ存ぜぬ国に生れ  
宝船辺野古の海は見えない振り  
水飯といひ乾飯といひ母様  
畢生は些事の嵩なり芥子漬  
香港を撲殺次は大蝙蝠

中根 文子

小満やざらりと乾く鍋の底  
かりそめに繋ぐ手と手や花菖蒲  
ジャンピングジャック青葉風つかめ  
でで虫の分だけ傾ぐ夜のシーソー  
交はらぬ「心」てふ文字花芒

中村 直子

銀杏散る千年の闇脱ぐように  
十二月八日節穴から朝日  
蓮の実とんで晴ればれとわが山河  
耳奥に第九の余韻冬の風  
桐の花暮しの奥にある戦後

なかもと淑子

ひいな目の目つもる話につれなかり  
新しい老いを見つけて初日記  
幼な児の赤い頬つべや寒の入り  
春浅しただあるだけの一日終え  
大蜘蛛は錠を外して来たのやら

長井 寛

ひらひらと詩のように舞う春の雪  
十重二十重いざれ白雲山ざくら  
影踏まぬよう千鳥ヶ淵の花疲れ  
うららかや空より高き富士の山  
人情の渦の揺蕩う荷風の忌

《会員・会友の近況》

- ・ご無沙汰しておりますが元気です。月一の千葉・木更津・君津での句会、月二のFAX句会を楽しんでおります。また、週二、三回カーブス、他の日は四、五千歩歩いています。県南での吟行会には是非お仲間に入れてください。(長濱 聰子)
- ・細々と俳句を楽しんでいます。(中澤 一紅)
- ・今年もこれが最後かと、充分にお花見をいたしました。(島 淑子)
- ・俳友に誘われ初めて「連句」を巻いた。「連句」をやると「俳句」が下手になると云われる方もおられるが、そもそも下手な俳句、これ以上下手にはならないだろうと開き直っている。(徳吉洋二郎)
- ・年齢とコロナのせいにして桜も見ず、春も過ぎてゆきます。句作りが日課のひとつ。図書館からの書籍と五七五で私なりの充実

私の感銘句

馬淵 津枝

作者名 号頁

身のうちの星座傾けメロン切る  
ひぐらしや残り時間が逃げていく  
雲の峰なんかイチローの背中  
行く春や散り急ぐ事何もない  
ふなこや大きな揺れはもう要らぬ  
型を替えコロナは次の隣国へ  
青いレモン遠きあの日の忘れもの  
色変へぬ松や地球は病んでゐる  
遠雷や考妣の背を追ひ今日のあり  
決意なんてたわいなきもの秋桜

小張 直子

薄氷のかたちになってゆく晩年  
横恋慕餅の程よき焦げ加減  
日向ぼこして飼ひ馴らす孤独  
いちじくの悲鳴もジャムにする無頼  
べたべたと七軒町の残り鴨  
その先は断崖といふ沖繩忌  
亡くなれば皆好人冬銀河  
採血のゆつくり抜ける春愁い  
白椿明日を思えば落ち切れず  
からかさき軍歌は寂し沖繩忌  
伊与田すみ  
青簾はじめて夫の髪を切る  
平凡がいい日溜りのすみれ草  
遠き日のわたしの分母狐に礼  
追伸のながくなるくせあめんぼう

作者名	号頁
清水 伶	140 4
長濱 聰子	140 5
武田 伸一	140 6
細野 一敏	141 6
藤岡 尚子	141 7
岡田 淑子	142 5
石井紀美子	142 6
神作 仁子	143 6
近藤 幸子	143 6
片岡伊つ美	143 7
長井 寛	141 4
千葉 智司	141 4
高久 清美	141 5
菊地 京子	141 7
岡田 淑子	142 5
池田 和人	142 5
大澤ひろみ	142 5
興津 恭子	143 5
加倉井允子	143 5
木之下みゆき	143 7
高木 一恵	140 5
高橋 宗史	140 6
並木 邑人	140 6
永井 奈々	140 6

冬董いつもの場所が良いという  
実名を伏せて花野を通り抜け  
山法師子ども息を太くせよ  
老狂やずかずかと蟻穴を出る  
ギリギリまで我慢吹き込む風船  
天の川宅急便の水とどく  
遠き日のわたしの分母狐に礼  
何世代も逆のぼる昔話しのことである。ある  
村に狐にだまされた男がいたそう。めぐりめぐって一億分の一として今こうして生きている  
とはとりあえず狐に一礼を。

中嶋 三雄

早蕨や風の子としてわが余生  
万緑の候母よ元気にしています  
青春の夢は未だに真夏の夜  
ぶらんこに二十の夢を乗せたまま  
どこまでも歩きたくなる春の道  
十葉の根深し母の一代記  
梅雨の月いつもの靴でみちのくへ  
発車ベル銀漢行きの小海線  
天の川宅急便の水とどく  
黒電話あつたね蜻蛉群れてたね  
青春の夢は未だに真夏の夜  
万人に青春はある。中身はそれぞれである。  
どうも、青春又は自分の青春、又は青春という言葉が、好きな人とそうでもない人がいるようである。作者と私は前者である。真夏も青春が横溢している季節で、大好きである。私は作者を存じ上げないが、私は青年（又は少年）のままであり続けたい。

作者名	号頁
富澤さち子	140 6
中村 冬美	140 7
秋尾 敏	142 5
山中 葛子	142 5
石井紀美子	142 6
川又 優	143 6
並木 邑人	143 6
高木 一恵	140 5
高橋 宗史	140 6
田村 麗	140 7
三須 民恵	141 7
柳沢 純	141 7
秋谷 菊野	142 5
山崎 聰	142 5
若林 佐嗣	142 7
川又 優	143 6
黒澤 雅代	143 6
田村 麗	143 6

した日を送っています。(永井 奈々)

- ・コロナウイルスの変形株オミクロン、更に新変形株が発生したようで不安です。お陰様で少し耕作していますので、野菜の植え込みに励み、気晴らしのできる有難さを感じています。(戸邊 光一)
- ・長年会社OB数名で月一回、指定店で世間話など楽しんできましたが、コロナ禍で店が閉店し三年目。一日も早く社会の異常事態が終ることを願っています。(馬場 馬子)
- ・この春、十五年ぶりに第二句集『寸法直し』を出しました。その直後に母が二度目の骨折、入院と慌しい日々を送っています。一冊にまとめるのは大変でしたが、少々無理してでも作っておいてよかったですと思っています。(津高里永子)
- ・昨年引越しにより、中北海道から千葉現住へ移りました。初めての出産初めての育児で、てんやわんやの日々を送っておりますが、落ち着きましたら句会などにも参加していきたいと思えます。(宮原 青佳)
- ・コロナ禍が未だ治まりを見せぬ昨今ですが、現役ケアマネージャーとして地域の高齢者宅を日々飛び回っている毎日です。(中根 文子)

長い石段を登ると目的地に着いた。この日は花吹雪の中の吟行を楽しむことが出来た。園内は万葉集に登場する植物を集め、それにまつわる和歌を展示。歌と草木を見比べて文学を楽しみながらの園内散策だった。(二浦 侃)

飯島 昭子

石蹴の石だけ残る夏の街  
 煮凝った時間を風がきてはくす  
 自分史のところで紙魚走る  
 過ぎし日は墨絵の如し花吹雪  
 糞虫の忘れ去られてゐる自由  
 一碗にさざなみを聞く岬かな  
 しばらくは心に萩の花が散る  
 遠汽笛して一切が冬の中  
 鶏頭花歌劇のように抱き起す  
 夕暮れを引きとめている蕎麦の花

松村 五月

石蹴の石だけ残る夏の街  
 突き当たるたびに道あり秋の声  
 水仙の系図いちばん上は海  
 夜には夜の青空のある桜かな  
 山鳩の三拍子から秋深む  
 自分史のところで紙魚走る  
 ふらここやいつも誰かの指定席  
 夜この言霊映画より静か  
 巻尺の元へ戻らず開戦日  
 水仙の系図いちばん上は海

きつとそうだ。水仙は碧く暗く深く冷たい海  
 から生まれたのだ。だからあんなに透明感のある  
 香りを放ち、そしていつも海を恋しそうに見  
 つめているのだ。

岡崎 翠

風流のマスクいろいろ老の春  
 平凡がいい日溜りのすみれ草

高木 一恵 140 5  
 高橋 宗史 140 6

皇帝タリア風に野望を盗まれて  
 ひとときを遊ぶ流れの紅椿  
 ふらここやいつも誰かの指定席  
 里山の寡黙をほどく梅まつ白  
 小春日や詩集一冊分の旅  
 大仏の窓よりのぞく土用波  
 草紅葉エンディング帳まだ白紙  
 永らへてまた八月の水を飲む  
 ふらここやいつも誰かの指定席  
 プランコが一番やでと言う子が見えるよう  
 す。指定席が良い。

池田 博臣

鶏頭を素描にすれば荒野なり  
 生ひ立ちにいつも風吹く竜の玉  
 黄泉よりも産土遠しどんど焼  
 心配するな充分生きた春の雨  
 老狂やずかずかと蟻穴を出る  
 いっさいは見えぬ重さの初詣  
 騙されてやるか白玉よく冷えて  
 ふらここや明日が怖くなかつた日々  
 レム睡眠クラゲは遠い海にゐる  
 息吸えば吐かねばならず土用波  
 いっさいは見えぬ重さの初詣  
 新年の希望に満ちた若かりし頃とは異なり、  
 限りある余命を見据えて、願ひ事も少なくなり、  
 心に重りを感じながらの初詣。「見えぬ重さ」  
 の巧みな表現に共鳴をしました。

松澤 伸佳

物差しに子の名うつすら十二月  
 袴田 菊子 140 4

石蹴の石だけ残る夏の街  
 香水の一滴完全なんてない  
 ペン立てが鉄の居場所鳥渡る  
 もてなしのただそれだけの団扇風  
 春着たたむ袂に残る異国の香  
 急くなよ急げば消える春の夢  
 にんげんが見えて来るまで草むしり  
 原爆忌など打つても曲る釘  
 万愚節笑い上戸の鳥を飼い

保坂 末子

ペン立てが鉄の居場所鳥渡る  
 言葉とはあやうい容器青梅落つ  
 自分史のところで紙魚走る  
 茄子胡瓜あの世の世はここにある  
 擦れ違ふとき早春のにはひけり  
 さくら見えておくこの世が遠くなる前に  
 口重き山河が動き出す雪解  
 籐寝椅子背中を海の風走る  
 原爆忌など打つても曲る釘  
 ふるさとに残してきたる春夕焼

澤田 寿一

問われるれば椿は花の重さなど  
 チューリップ生徒のいない小学校  
 足音に春の鼓動のかさなれり  
 ぶらんこに二十の夢を乗せたまま  
 燈明の揺るる読経や春の雷  
 神田川風はさくらの声拾ふ  
 暖めた沈黙によぶ百合鷗

直江 裕子 140 5  
 高橋 宗史 140 6  
 中澤 一紅 141 5  
 三須 民恵 141 7  
 渡邊 竹庵 142 5  
 上野 紫泉 142 7  
 菊地 京子 143 4

キルト刺す一針ごとに掬う秋  
噴水に真つ正直な芯がある  
二期の音を集めて下足箱

三好美穂子

ひぐらしや残り時間が逃げていく  
黒マスク酸素不足の魚ぞろぞろ  
ひらがなの感傷でとぶ秋揚羽

街騒をなだめるように黒揚羽  
鉄線花命をつなぐ距離のあり  
散骨の海を泳ぐか大陸まで

わくらはば風のうろこか定型詩  
ふらこや明日が怖くなかつた日々  
白樺明日を思えば落ち切れず  
歌うスニーカー冬晴れの自由律

長瀨 聰子

草青むしずかな爆発の序曲  
終戦忌水平線を太く描く  
心配するな充分生きた春の雨

ひそかに筋トレ水鳥が遠すぎる  
初蝶かわれより剥がれゆく何か  
自分史の右半分は大枯野

烏瓜遠くが見えてさびしから  
行きぢがいもあつたね花のあすか山  
原爆忌など打つても曲る釘

息吸えば吐かねばならず土用波  
心配するな充分生きた春の雨

歳時記によれば「春雨」は単に春に降る雨で  
はなく「やさしくあたたかく降りそそぐ、しつ  
とりとした風情のある雨」とある。「心配する

な」も「充分生きた」も闘病中の一敏さんの眩  
き、自分への励ましでもあり説得でもあろう。  
降る度に暖かさを招く雨・木の芽を張り、草の  
芽の伸ばし花を咲かせる春の雨。それを待ち望む  
心、「まだまだ生きたい」を季語が語る。句友た  
ちの祈りが届き再び笑顔で会える日を待っている。

森井美恵子

身のうちの星座傾けメロン切る  
灯台も我も読点鳥わたる  
顔無しの息ひそめゆく春の闇

濁筆の長き縦棒十二月  
どこまでの炎天いつまでの汚染水  
動かざる山うごかして花万朶  
少女いま抱へ切れない薔薇と棘

騙されてやるか白玉よく冷えて  
アイスの棒黄泉の入口にて捨てる  
噴水に真つ正直な芯がある

小林 実

石蹴の石だけ残る夏の街  
鶏頭を素描にすれば荒野なり  
逃亡といえなくもなし春の泥

冬董いつもの場所が良いという  
草青むしずかな爆発の序曲  
花いつも向う岸より咲いてくる

三鬼の忌煙の出ない焼肉屋  
失恋の話大好きかき氷  
原っぱの不思議な扉一年生  
どの道も空籤なしの春の山

冬董いつもの場所が良いという 富澤さち子  
一見平明、しかし深い句。春咲く董が冬に咲  
いている。いつも咲いているところと違う所に、  
春に咲き同じ場所に咲きたいと願う董。又、冬  
董で切つていつもの場所が良いと思うのは作者  
なのかもしれない。良い句は幾通りでも読める。

加藤 法子

のどけしや底曳網を屋根に干し  
生ひ立ちにいつも風吹く竜の玉  
大西瓜どつこい熱く生きてゐる

どこまでの炎天いつまでの汚染水  
薄水のかたちになつてゆく晩年  
透きとおる風を重ねて朝桜  
懐に風を馴染ませ六月来

行きぢがいもあつたね花のあすか山  
これやこの自肅のかたち寒卵  
無花果の花は実の中口の中

阿部さくら

水仙の系図いちばん上は海  
牛の仔のすでに牛なり立ち上がる  
動かざる山うごかして花万朶

薄水を踏めばわたしの割れる音  
こゑ低く闇の硬さへ豆を打つ  
透きとおる風を重ねて朝桜

里山の寡黙をほどく梅まつ白  
擦れ違ふとき早春のほひけり  
海鳴りを取り込んでいる栄蝶の殻  
レム睡眠クラゲは遠い海にゐる

川上 典子	143	5	清水 伶	140	4	長瀨 聰子	140	5
小林 実	143	5	長瀨 聰子	140	5	高橋 健文	140	5
小池美佐子	143	6	高木 一恵	140	5	鈴木まんぼう	140	6
羽村美和子	140	7	中嶋 三雄	140	5	徳吉洋二郎	141	4
徳吉洋二郎	141	4	徳吉洋二郎	141	4	長井 寛	141	4
細野 一敏	141	6	長井 寛	141	4	森 孝子	141	6
菊地 京子	141	7	福田志津子	141	7	矢野 忠男	142	5
宮本美津江	141	7	加藤 法子	143	5	岡田 淑子	142	5
門谷 杜人	142	4	越野 雄治	143	5	横須賀洋子	142	7
森村 文子	142	4	小林 実	143	5	小多田文子	143	7
岡田 淑子	142	5	菱木 良一	140	4	直江 裕子	140	5
山中とみ子	142	6	清水 伶	140	4	千葉 信子	140	5
小林 実	143	5	直江 裕子	140	5	長井 寛	141	4
細野 一敏	143	5	富澤さち子	140	6	高久 清美	141	5
一敏	143	5	羽村美和子	140	7	浜岡 紀子	141	5
一敏	143	5	中村 冬美	140	7	森 孝子	141	6
一敏	143	5	細野 一敏	141	6	宮下 奈緒	141	7
一敏	143	5	秋谷 菊野	142	5	岡田 春人	142	5
一敏	143	5	小川トシ子	143	4	蛭名 節昌	143	4
一敏	143	5	國分 三徳	143	5	越野 雄治	143	5

津田沼研究句会報告

第三五三回 (令和四年二月八日)

通信句会 担当 徳吉洋二郎

東風吹かばチエロとヒアノとサンサーンス 増田 豊子  
 犬猫会議 悪い人間について 吉野 精  
 きさらぎの合鍵としてチヨコレート 徳吉洋二郎  
 七草やお粥嫌いの仏前に なかもと淑子  
 指切りをすればからたち刺を消し 栗原 正子  
 七色の糸をたぐれば春よ来い 鈴木 瑩子  
 手をつなく小さき着ぶくれ老夫婦 伊与田すみ  
 遠ち此ちの有りで無きごと春茜 高木 一恵  
 ハライソを目差す眼力冬の蝶 並木 邑人  
 家庭内民主化進み味噌つくる 白木 暢子  
 立春の猫入念に毛づくろい 村上 澄子  
 小見出しの日々の逝き方福寿草 池田 博臣  
 下萌や悪しき記憶を初期化する 竹田 彩子  
 思う壺に君はぼろんと春生まれ 横須賀洋子  
 一滴の水の音より春の山 星野 一恵

第三五四回 (令和四年三月八日)

通信句会 担当 白木 暢子

コロナ禍に加え砲弾道真忌 並木 邑人  
 うらうらと紐電話から春の音 鈴木 瑩子  
 ひとすじの少女のなみだリング句う 吉野 精  
 うすらいの如き日常西方浄土 池田 博臣  
 リタモレノ髪型いいね早春譜 伊与田すみ  
 春暁を切れぎれにしてバイク音 星野 一恵  
 シェルターの母に光をミモザの日 白木 暢子  
 国境へ押すなおすなの蟻の道 徳吉洋二郎  
 春風や江ノ電ホームに笠智衆 栗原 正子  
 三月昏し朝のトリスト黒焦げに 横須賀洋子  
 水仙の一人舞台や夜深深 なかもと淑子  
 水仙の一人舞台や夜深深 高木 一恵  
 畑打ちの帽子日深に妻病む人 股野 久子  
 いくたびも杖畳みをり二月尽 竹田 彩子  
 娘らの齡となりし雛かな

雛壇のひとつひとつがみな主役 増田 豊子  
 蛇穴を出て生足にたじろぎぬ 村上 澄子

第三五五回 (令和四年四月十二日)

(於津田沼一丁目町会会館)

司会 池田 博臣

初桜古木伐られし土匂ふ 股野 久子  
 黙食のうな重よろし飛花落花 村上 澄子  
 わたしピアノ春のショパンを食べたいな 池田 博臣  
 花は葉に地球ころりと逆回転 吉野 精  
 さくら満開少年たちに翼 鈴木 瑩子  
 魂もぬげがらも菜の花と空 白木 暢子  
 あの人のこの人の顔石鹸玉 増田 豊子  
 腕白の秘密基地にも春の雨 なかもと淑子  
 麦の秋 一歳若く返答す 伊与田すみ  
 花満ちてひとりふたりと消えてゆく 星野 一恵  
 飛花落花いまは優しくネ母さん 横須賀洋子  
 キエフ公園桜隠しに反駁す 並木 邑人  
 鳥雲に入るシェルターも墓も無し 高木 一恵  
 老いてなお若いと言われ桜咲く 徳吉洋二郎  
 蝌蚪の紐どろり宣う侵略論 竹田 彩子

青葉研究句会報告

第一二五回 (令和四年一月二十七日)

通信句会 担当 矢野 忠男

出発は鸚鵡の黙す雪の朝 横山 郁子  
 発心や雁木途切れに小草生う 並木 邑人  
 世の中が一步先ゆく流水期 池田 博臣  
 水温み太宰のころ発光す 長井 寛  
 百発百中パレンタインデー 徳吉洋二郎  
 北国の布団重たき白襖 越野 雄治  
 椿つらつら発酵まで絵空事 長濱 聰子  
 如月の朱を発光す漆の葉 矢野 忠男  
 飛入りの本音ちらつくおでんの香 三須 民恵  
 徹夜すや水のきかれてシクラメン 石井紀美子  
 振袖が神のお顔に初詣 吉野 精

健啖をほめられけなされ雑煮食ぶ 鈴木まんぼう  
 小為替の百円は倍冬雲雀 山崎 幸子  
 下手可愛い仮名の箸紙卓は笑み 栗原 正子  
 冬のブルドックチャーチルのごときかな 加賀谷秀男  
 顔ほどの初満月や乳の色 森井美恵子  
 安堵とは気を張らぬこと日向ぼこ 加藤 法子

第一二六回 (令和四年二月二十四日)

通信句会 担当 矢野 忠男

現し世と浄土の間春障子 長井 寛  
 温そうなメロデー聞かせ灯油売る 加藤 法子  
 蝶発ちぬ貸間有り四字キャベ津 栗原 正子  
 現し世に熱き水尾曳く冬火花 長濱 聰子  
 弾初めの駒を外する一の糸 矢野 忠男  
 夢みてた雪どけの夢ナイヤガラ 吉野 精  
 突然に水柱砕ける石畳 横山 郁子  
 家居長し雛の使をまつてゐる 森井美恵子  
 初めてのお使い梅の花ひらり 三須 民恵  
 紅さして歩いておれり嫁が君 加賀谷秀男  
 青空や出番まだかと犬ふぐり 山崎 幸子  
 少しずつ戻る日常寒の木瓜 徳吉洋二郎  
 帰るさの気紛れ梅の力石 並木 邑人

第一二七回 (令和四年三月二十四日)

(於千葉市民会館)

司会 徳吉洋二郎

寝転んで揺蕩ふ野辺に雲雀落つ 越野 雄治  
 歴史書を現実に見るサイネリア 池田 博臣  
 円周率無限天下泰平おぼろ 長濱 聰子  
 啓蟄や接種三回出の支度 矢野 忠男  
 啓蟄ぞ花なき地表飛ぶ砲弾 栗原 正子  
 恋猫の迷い込みたり木挽町 徳吉洋二郎  
 不都合な所マスタテ桜咲く 山崎 幸子  
 十重二十重いづれ白雲山桜 長井 寛  
 暗闇と決別し三月の空 加賀谷秀男

退化せぬ戦争願望<sup>いんぼう</sup>究電  
久闊を叙する桜の合唱と  
水温む一斉顔出すチンアナゴ  
ポイントは今日期限切れ万愚説  
雪寄せてはまなす通り我慢時  
春昼の目筈に乾ぶとんがらし

並木 呂人  
三須 民恵  
鈴木まんぼう  
森井美恵子  
横山 郁子  
加藤 法子

### 柏研究句会報告

第一一三回 (令和四年二月)

通信句会 担当 高橋 宗史

逃げ水を追ひていのちの果てゆくか  
けんちん汁困めばシヨパン流れ来る  
銀色にとき澄まされる冬のオカリナ  
春逝くに何か叫んでほしかった  
アベマリア待春の脳さざめかす  
吾が影のはかない長さ冬に入る  
企てはウイルス変異雪女  
主治医銃殺雪を握らば粉々に  
引き戸より徳湖の寒さかな  
一色に平らな湖の寒さかな  
凍ゆるぶ秘仏に安房の波の音  
玉砂利の膨らんでゆく四温晴  
百年の旅の途中の炉辺話  
風花や接種済証レディ・ガガ

井上けい子  
高橋 宗史  
川上 典子  
野口 京子  
木之下みゆき  
下村 洋子  
橋本志津子  
椎名 鳳人  
並木 邑人  
岡田 春人  
中里 結  
長井 寛  
藤好 良  
佐藤 鈴子

LED放つ折りや花ミモザ  
鎌の柄に残りし三寒四温かな  
風花やラインのひとり失へり  
膝小僧に俺と書きやる寒の明け

橋本志津子  
椎名 鳳人  
佐藤 鈴子  
並木 邑人

### 第一一五回 (令和四年四月)

通信句会 担当 高橋 宗史

落椿深紅の面艶やかに  
木馬から子の攫はれしくららの夜  
菜の花の水平線が軋みだす  
白木蓮シヨパンの曲に乗って咲く  
原郷という出来ごころ唸り風  
いつばい泣いていつばい笑つて卒園す  
卒塔婆の四十七本花の宴  
類想の丘の頂路の臺  
撤退や蟻の列から蟻こぼれ  
うぐいすの手本のように答えけり  
にわたずみ春は甘噛みきつね雨  
花の昼雨情の赤い靴の鐘  
能面や夕昏れどきの花白く

佐藤 鈴子  
中里 結  
木之下みゆき  
岡田 春人  
並木 邑人  
川上 典子  
長井 寛  
藤好 良  
椎名 鳳人  
野口 京子  
下村 洋子  
橋本志津子  
高橋 宗史

### 君津研究句会報告

第二十二回 (令和四年二月三日)

通信句会 担当 石井紀美子

春の雪踏みて柩の道作る  
海が哭く雪に埋れし流人墓地  
ダウンジャケット圏外区へも翔べる  
春光にかざして合わぬ眼鏡拭く  
寒林を出でし飴を追う飴  
必勝の白田重たき三日かな  
北国の布団重たき三日かな  
コーヒー粉ぶつく膨らむ今朝の春  
春埃アンダーパスに差す光  
愛犬に昭和の湯たんぼ抱かせやり  
凍星の光のかげら凱旋門

加藤 法子  
山田たかし  
田沼美智子  
森 孝子  
石井紀美子  
長濱 聡子  
加藤 法子  
田沼美智子  
馬淵 津枝  
泉 志眞子  
山田たかし  
石井紀美子  
徳吉洋二郎  
前田 孝子  
森 孝子  
村田 満枝  
羽矢 眞人  
鈴木 美幸  
並木 邑人  
金澤 恵子  
古賀 壽昭  
小澤 富子  
越野 雄治

### 第二十三回 (令和四年三月三日)

通信句会 担当 石井紀美子

「句の鬼」の意地の足跡名残雪  
一敏さんを悼む  
佐保姫をつれてくぐりぬ縄暖簾  
家計簿を耕す指の電卓音  
春炬燵はずむ話に嘘すこし  
極細の筆ペン滲む春の雪  
野仏に逢いたし春の細野道  
人生の奔流に入り春一番  
亀鳴くや脳細胞休ませよと  
引き算のごとき生活や鳥雲に  
桜貝箱根細工の秘密箱  
春の夜脳底抜けの読書かな  
細細と老舗存ふ草の餅  
甘酒をわかつ母から春の歌  
委細聞くまでもなく陸月旅立ちぬ  
冴返るスノーダー宙を舞ふ  
傘壽の曾孫二人の雛祭り  
保育所の庭に一本花明り  
水底の細波黒き日永かな

並木 邑人  
馬淵 津枝  
古賀 壽昭  
金澤 恵子  
泉 志眞子  
前田 孝子  
羽矢 眞人  
吉野 精  
長濱 聡子  
加藤 法子  
田沼美智子  
馬淵 津枝  
泉 志眞子  
山田たかし  
石井紀美子  
徳吉洋二郎  
前田 孝子  
森 孝子  
村田 満枝  
羽矢 眞人  
鈴木 美幸  
並木 邑人  
金澤 恵子  
古賀 壽昭  
小澤 富子  
越野 雄治

### 第二十四回 (令和四年四月七日)

通信句会 担当 並木 邑人

行く末は考えまいぞ夕桜  
亀鳴くや母の好物知らぬまま  
春の街夜はまあるく降りてくる

小澤 富子  
馬淵 津枝  
鈴木 美幸

山ざくら明日は帰れと父が言う  
朝桜今日旅立の子に会いに  
悔しさの思い流れし春の川  
生あれば死ありさくらの方程式  
春一番瓦職人四つん這い  
正論へことばの乱射黄砂ふる  
散る桜つれて一敏浄土えと  
御衣黄や須臾王侯の寸劇  
頼朝桜ときに邪魔する氏素性  
桜咲く父の車の待つ駅舎  
春風やもへじもへじがくしやみする  
さくらさよなら一刺しの言葉じり  
夜桜や世の結界に零れ散る  
アルプスを田面は映す雪解晴  
水甕に水充たす夜や桜散る  
朋よともカラオケ俳句さくら散る

加藤 法子  
森 孝子  
羽矢 眞人  
長濱 聰子  
金澤 恵子  
田沼美智子  
吉野 精  
並木 邑人  
徳吉洋二郎  
泉 志眞子  
村田 満枝  
石井紀美子  
前田 孝子  
山田たかし  
越野 雄治  
古賀 壽昭

### ひろば

## ■市原市春季俳句大会

四月十七日、「秀」主宰染谷秀雄氏を招いて開催。兼題の部は県内外から四五〇句を集め、当日の席題句会には二十八名が出席した。なお総会の議案及び席題を予め郵送し、時間を最大限短縮して実施した。(並木邑人記)

☆兼題の部／梨の花・音・雑詠三句一組  
市原市長賞  
峡に住み峡に倦む日や種を蒔く 伊東 泰子  
市原市俳句協会賞  
ひと吹きに百の夢ありシヤボン玉 芦刈 茜  
議長賞  
限りなく日向をひろげ犬ふぐり 加藤 法子  
教育長賞  
だいすきとひらがなのふみ桃の花 大内田芳乃

### ☆席題の部／麦青む・をだまき

市原市長賞  
遠山に風のねぐらや麦青む 小澤 富子  
市原市俳句協会賞  
麦青し農機を囲む実習生 鈴木 喬二  
議長賞  
どの家にもかつて牛馬や麦青む 戸谷 洋子  
教育長賞  
麦青む風やはらかに遠筑波 木村みどり

### 図書紹介

#### ■句集「蟬しぐれ」 大見 充子

令和四年一月二十八日刊 紅書房  
眠るなよ星の音する星月夜  
やさしさは沈黙の中蟬しぐれ  
鳴咽とも桜吹雪のど真ん中

### 掲示板

#### 《会員・会友異動》

● 逝去 (会員) 入部和夫、高田柴秋  
● 退会 (会員) 山口夕紀、平岡育也

#### ● 新会員

柴田洋吾 (会員) 松林孝志紹介  
石 尽 (会員) 後藤 章紹介  
大喜京香 (会員) 後藤 章紹介  
村田満枝 (会友) 石井紀美子紹介  
金田めぐみ (会友) 高橋宗史紹介  
● 俳名変更 浪岡はるか↓浪岡 玄

#### ● 《令和四年度第二回幹事会》

日時 令和四年五月二十四日(火)午後一時より  
場所 船橋市勤労市民センター

### 議題

- 一、令和四年度総会・俳句大会の結果、会計報告等
- 二、幹事会の運営体制について
- 三、現代俳句協会(本部)の動向について
- 四、各地区協会総会・俳句大会について
- 五、令和四年度春の吟行会(市川市万葉植物園)の結果・会計報告等
- 六、会報一四五号について
- 七、各研究句会の状況について
- 八、各部打合せ(議題九、終了後)
- 九、その他

### □□事務局・編集部だより□□

● 今年度は役員改選年に当たり、四月八日に引継ぎの臨時幹事会が行われました。新メンバーとなり、早速、吟行会や会報編集ほか各部会動き出しております。吟行など良い季節になりました。皆様方のご健吟を念じます。

現代俳句千葉 第一四五号  
令和四年六月一日発行

発行人 千葉県現代俳句協会  
会長 並木 邑人

現代俳句千葉編集部  
〒278-0037 野田市野田 六七七-11A二二五

千葉県現代俳句協会事務局  
〒277-0084 柏市新柏二一三三六 木之下みゆき

岡田 春人  
TEL・FAX 〇四一七一六一一六三九